

『源氏物語』「幻」巻論

勝亦 志織

〔キーワード〕①『源氏物語』 ②物語 ③記憶 ④手紙

一、「梅枝」巻の記憶と「春」の訪れ

紫の上亡き後の光源氏の姿を描写する幻巻。そこには一年をかけて紫の上を亡くした悲しみを癒し、出家あるいは自己の死へ向けた光源氏の姿がある。年中行事をふまえて描かれるこの巻の問題はこれまでも論じられてきたが、そこにはまだ、物語内の過去をふまえた考察が抜け落ちていないだろうか。本論では梅枝巻の記述を一つの物語内過去として捉え、それを考察の端緒として、幻巻の問題を見ていこうと思う。

幻巻の冒頭、「春の上」を亡くした源氏のもとにも「春」は訪れる。

春の光を見たまふにつけても、いとどくれ惑ひたるやうにのみ、御心ひとつは、悲しさの改まるべくも

あらぬに、外には、例のやうに人びと参りたまひなどすれど、御心地悩ましきさまにもてなしたまひて、御簾の内におおはします。兵部卿宮渡りたまへるにぞ、ただうちとけたる方にて対面したまはむとて、御消息聞こえたまふ。

「わが宿は花もてはやす人もなし何にか春のたづね来つらむ」
宮、うち涙ぐみたまひて、

「香をとめて来つるかひなくおほかたの花のたよりと言ひやなすべき」

紅梅の下に歩み出でたまへる御さまの、いとなつかしきにぞ、これより他に見はやすべき人なくや、と見たまへる。花はほのかに開けさしつ、をかしきほどの匂ひなり。御遊びもなく、例にvariしたること多かり。

(幻④五二一—五二二)

ここでの「春の光」とは、源氏が紫の上を回想する契機であり、共に愛でてきた「春」を表すものである。その「光」と「くれまどひ」が対照的に述べられていることは、すでに指摘されている通りだろう^①。この「春の光」とともに、春を愛でる人物である螢兵部卿宮が源氏を訪れる。紅梅の咲き匂ひの中に螢宮の登場。ここではおのずと、梅枝巻の薫物合せの場面が思い浮かぼう^②。

二月の十日、雨すこし降りて、御前近き紅梅盛りに、色も香も似るものなきほどに、兵部卿宮渡りたまへり。御いそぎの今日明日ににけることも、訪らひきこえたまふ。昔より取り分きたる御仲なれば、隔てなく、そのことかのこと、と聞こえあはせたまひて、花をめでつつおはするほどに、前齋院よりとて、

散り過ぎたる梅の枝につけたる御文持て参れり。

（梅枝③四〇五）

このように、梅枝巻では、やはり紅梅の盛りに蛭宮が登場したのであった。そして、宮の訪問に加え朝顔齋院からの薫物が届けられたことにより、薫物の試みが行われることになる。この梅枝巻での源氏と紫の上は、愛娘の入内準備はさることながら「人の御親げなき御争ひ心なり」（梅枝③四〇五）とされるほどの熱中ぶりである。こうした遊びが許されるほど、六条院は完全に近い形であったとも言えようか。いずれにしても、梅枝巻は、娘を入内させ、再び源氏と紫の上、二人だけの時間が始まるはずの巻であった。しかし、若菜上巻の女三宮の降嫁による六条院の混乱と崩壊を、幻巻の源氏も、そして読者も知っている。幻巻から振り返ってみれば、紫の上との平穏な日常こそ梅枝巻が最後であった。

そして、幻巻にも、その梅枝巻と同じ春が蛭宮と共に訪れる。そもそも、梅枝巻での蛭宮の薫物への判は、源氏から「心きたなき判者なめり」（梅枝③四一〇）と言われながらも、紫の上の「梅花」に対し「対の上の御は、三種ある中に、梅花はなやかにいまめかしう、すこしはやき心しらひを添へて、めづらしき薫り加はれり。」（梅枝③四〇九）と、春の紅梅の盛り、前掲の引用部にもあるように「色も香も似るものなき」状態で、「梅花」を賞賛していた。季節的な背景を鑑みたとき、明らかに紫の上の「梅花」こそ、この場において最も優れたものとして判断されてはいなかったか。蛭宮が春・紅梅と共に訪れることは、幻巻までの物語の記憶を持つ者、つまり光源氏や読者にとって、紫の上を美的に回想しようとする有り様が見られるのである。

もちろん、幻巻冒頭の表現は、直接に梅枝巻を指し示すことはない。しかし、「花もてはやす人」であった紫の上がいけない今、蛭宮以外に紅梅を「見はやすべき人なくや」と源氏が見つめているのは、梅枝巻において、

紅梅と紫の上の「梅花」を賞賛した蛭宮だからこそである。幻巻の冒頭、それは物語内の記憶をベースにして、紫の上の記憶を共有できる蛭宮が登場することで、よりいっそう源氏の悲嘆を明確なものにしているのではないだろうか。〈記憶の共有〉が、ここでは不在の紫の上をいっそう際立たせるのである。

二、季節の変化と「物語」のゆくえ

幻巻の時間の流れについて、例えば小町谷照彦氏は、物語は御法巻で歩みを止めると指摘されたうえで、「幻」は光源氏の時間との格闘の場なのである。「幻」の一年は、光源氏がその最後を全うする為に必要であった³⁾とし、また、後藤祥子氏は、「紫の上亡きあと、源氏が心静かな出家の時を迎える準備期間として、なんら物語の進展すべくもない、ただ時間の支配に任せた一年を叙すべく設けられた巻だということができると述べられる⁴⁾。実際、幻巻にはこれといって大きな出来事があるわけでもない。ただ時間の流れにそった、紫の上を亡くした源氏の日常が綴られるだけである。そこには、稲賀敬二氏が指摘するように、これまで「時間」を生み出してきた「光源氏が、今静かに「時間」の流れの中に身をゆだねて、一生を回想している。はじめてここに一個の人間光源氏がいる」のであろう⁵⁾。幻巻の「時間」は、源氏の管理下を離れ、外側を流れているのである。

その源氏の生活を、紫の上の服喪の期間と捉えるのか、あるいは出家までの時間と取るか、さらには思い出に浸った生活と取るか、これまで多くの解釈がとられてきた⁶⁾。そして、その特異な表現を支えるために、年中行事的な、あるいは歌日記的な文体が要請されてきたとされる⁷⁾。これまで述べられてきた幻巻についての

所論は、ひとえに源氏の「死」あるいは「出家」に向けた生活が、一年の叙述を通して紫の上への哀傷と懐旧に彩られているとする。

しかし、そうした生活を物語が叙述する意味とは何か。物語は懐旧を述べていきたくったのだろうか。本論では、この源氏の一年は、紫の上をへ忘れるための一年と捉えたい。つまり、忘却に向けての営みを幻巻は綴るのである。記憶から忘却へ、紫の上亡き今、源氏にとって出家の絆となるような存在はいない。ただ、自身の上に対する思いこそ、大きな絆なのだ。季節の循環と共に、源氏は紫の上を忘れようとする。その過程として様々な行事が利用されているのではないだろうか。まずは春を背景にした周囲と源氏とのかかわりを「記憶の共有」と「物語」という二つの点からみていきたい。

前節で見たように、新春、蛸宮の来訪は、二人の共有する紫の上の記憶をまざまざと思い出させる。そして、周囲に仕える女房たちと「つれづれなるままに、いにしへの物語」(幻④五二二)をする。この「いにしへの物語」は、かつて紫の上を嘆かせた過去であり、同時に「そのをりの事の心も知り、今も近う仕うまつる人々は、ほのぼの聞こえ出づるもあり。」(幻④五三三)と、紫の上の記憶を共有する人々との「物語」であった。この状況では、源氏は紫の上の過去を共有する人物との対話が可能なのである。それは続く、中納言の君、中将の君たちとの「御物語」も同様であろう。なかでも中将の君については、源氏は紫の上の「御形見の筋」として捉えており、こうした形見の人々との「物語」が、新春の源氏を支えているといってもいいだろう。

その「物語」が再び述べられるのは、明石の御方を訪ねた折である。「こなたにては、のどやかに昔物語などしたまふ。」(幻④五三三)と、直前に訪ねた女三宮のもとと違って変わり、明石の御方とは「物語」が可能なのである。ここにも「記憶の共有」が問題とはならないだろうか。直前の場面で、御簾越しながらも対面

した夕霧や紅梅や桜を愛でる匂宮の存在は、紫の上との過去、あるいは紫の上の記憶を共有していた。しかし、女三宮とは、そうした共有できる過去はない。女三宮の存在は紫の上を思い出させる媒体にしかならず、対話の可能性はまったくない。それが、明石の御方のもとに行くと、一転して「物語」が浮上する。

明石の御方との「物語」は、「昔物語」から「昔今の御物語」に発展し、それは「かくても明かしつべき夜を」と思うほどである。しかしながら、源氏は明石の御方のもとから帰る。源氏と明石の御方との二人の間には、確かに紫の上の記憶が共有されており、それは「昔物語」として対話できるものであった。しかし、それは「昔今」の物語まで連続と続いていく。夜が明けるまで「物語」を続けたら、そこには、もはや紫の上の姿はないだろう。だからこそ源氏は、明石の御方のもとから自室にもどるのである。

萤宮・匂宮・女三宮・明石の御方・女房たちと、紫の上の記憶を共有した人々との「物語」が述べられてきた。そこには、「物語」によって紫の上を回想し、あるいは「物語」の不可能性によって紫の上を回想する源氏の姿があった。背景の季節は春、春の上とも称された紫の上が思い出されるにふさわしい季節であった。しかし、幻巻における「物語」という単語はここで消える。幻巻の時間は、おだやかな「物語」と回想の時間を越え、この後、スピードを上げて行事と源氏の歌を綴ることとなる。

三、文の焼却と煙

衣更・葵祭・七夕を過ぎ、八月には紫の上の一周忌の法要、そして、重陽の節句、神無月の時雨を経て、五節が述べられた後、源氏は紫の上の文を処分する。

落ちとまりてかたはなるべき人の御文ども、「破れば惜し」と思されけるにや、すこしづつ残したまへりけるを、ものついでに御覧じつけて、破らせたまひなどするに、かの須磨のころほひ、所どころより奉りたまひけるもある中に、かの御手なるは、ことに結びあはせてぞありける。みづからしおきたまひけることなれど、久しうなりける世のことと思すに、ただ今のやうなる墨つきなど、げに千年の形見にしつべかりけるを、見ずなりぬべきよと思せば、かひなくて、疎からぬ人々二三人ばかり、御前にて破らせたまふ。

いと、かからぬほどのことにてだに、過ぎにし人の跡と見るはあはれなるを、ましていとどかきくらし、それとも見分かれぬまで降りおつる御涙の水茎に流れそふを、人もあまり心弱しと見たてまつるべきがたはらいたうはしたなければ、おしやりたまひて、

死出の山越えにし人をしたふとて跡を見つつもなほまどふかな

さぶらふ人々も、まほにはえひきひろげねど、それとほのほの見ゆるに、心まどひどもおろかならず。この世ながら遠からぬ御別れのほどを、いみじと思しけるままに書いたまへる言の葉、げにその折よりもせきあへぬ悲しさやらんかたなし。いとうたて、今一際の御心まどひも、女々しく人わるくなりぬべければ、よくも見たまはで、こまやかに書きたまへるかたはらに、

かきつめて見るもかひなし藻塩草おなじ雲居の煙とをなれ

と書きつけて、皆焼かせたまふ。

（幻④五四六―五四八）

この処分について、基本的には出家に至る身辺整理の一環と捉えられる。しかし、この文の処分は、幻巻の中

でも大きな転換点である。伊井春樹氏によれば、この場面は、光源氏の「自らの情念との決別」の場であり⁽⁸⁾、松木典子氏によれば、「当該場面は紫の上追憶の日々の分岐点ないし終着点と見なすことができ、筆者は光源氏の追憶の日々を相対化したものと位置づけている」ものである⁽⁹⁾。また、一方で『竹取物語』との関連が指摘されており⁽¹⁰⁾、富士の山頂で不死の薬と手紙を焼かせた帝と、紫の上の手紙に自身の歌を書きつけ焼いた光源氏の姿が重なる。

源氏の何事も起こらない日常を描いた幻巻において、この紫の上の文焼却は、源氏が唯一能動的に動いた事柄であるといえるだろう。紫の上の一周忌の法要さへ夕霧に任せ、その記述は七夕と重陽の節句にはさまれ、過ぎる季節の情景であった。しかし、ここでの文焼却は、源氏の出家の覚悟とともに述べられる。出家してしまえば、現世での文は、どんなに形見にたくとも「見ずなりぬべき」ものである。そうした文を、源氏はまず「破らせ」、そして「みな焼かせ」てしまうのである。確かに、ここには「自らの情念と決別」した源氏の姿がある。しかし、この文焼却はもう少し重い意味があるのではないだろうか。

源氏の二首目「かきつめて見るもかひなし藻塩草おなじ雲居の煙とをなれ」は、もはや紫の上を回想する手段の必要性を示す。どんなに、回想し、追憶し、哀悼にふけろうとも、紫の上はもはや戻らない。そうした諦念がここには見られる。この源氏の歌は、その直前の和歌と間に、「非常に大きな飛躍がある」⁽¹¹⁾と指摘されている。確かに歌を挟み、紫の上の文に対し、悲しみに惑い涙を流す源氏と、その文を焼き捨ててしまう源氏では、大きな変化がある。ここまで、源氏は様々な人やものを通して紫の上を思い出してきた。涙にくれては、「何ごとにつけても、紛れずのみ月日にそへて思さる」(幻④五四五)状態であった源氏が、なぜここで急に紫の上の思い出と決別してしまうのか。すでに年末をひかえ、出家の準備が必要ではあった。また、『竹

取物語』の帝のように、かぐや姫Ⅱ紫の上宛の手紙を焼くことで、相手との交信をはかる行いであったのかもしれない。だが、ここでの文焼却は、源氏にとつての紫の上葬送の場面であつたと捉えたい¹²⁾。

もちろん御法巻において、紫の上の葬送は描かれていた。

やがて、その日、とかくおさめたてまつる。限りありけることなれば、骸を見つつもえ過ぐしたまふまじかりけるぞ、心憂き世の中なりける。はるばると広き野の所もなく立ち込みて、限りなくいかめしき作法なれど、いとほかなき煙にてはかなく昇りたまひぬるも、例のことなれど、あへなくいみじ。空を歩む心地して、人にかかりてぞおはしましけるを、見たてまつる人も、さばかりいつかしき御身をと、ものの心知らぬ下衆さへ泣かぬなかりけり。御送りの女房は、まして夢路に惑ふ心地して、車よりもまろび落ちぬべきをぞ、もてあつかひける。

（御法④五一〇―五一一）

だが、その葬送の煙は「いとほかなき煙にてはかなく昇りたまひぬる」ものであり、また、源氏は「空を歩む心地して、人にかかりてぞおはしましける」様子であつた。源氏にとつて、紫の上の葬送は葵の上の時とは異なり、「くれまどひたま」うものであつた。その源氏が、「幻」巻にいたりようやく正気を取り戻し、紫の上の文を焼く。「ほかなき煙」であり「あへなくいみじ」かつた紫の上は、源氏の中に一年燻りつづけ、そして再び文の中に「ただ今のやうなる墨つき」として現れる。自身の回想の中の紫の上ではなく、かつての紫の上は今書いたやうな文を目の前にして、源氏は最後の惑いに暮れる。その惑いの果てに、文の中に現れた紫の上は焼かれることになる。それは、言い換えれば源氏の中の紫の上の記憶を焼いたことになる。ここでは、文を焼

いた煙がどのようなものであったか、その記述はない。しかし、この手紙を焼くことによって、源氏は紫の上を忘却することが可能になるのではないだろうか。

四、〈記憶の共有〉と「物語」

そもそも、物語の中の「記憶」とはいったい何であるのだろうか。幻巻の中で、源氏は様々な過去を回想する。女三宮降嫁の折りの紫の上の様子、自身の人生の述懐、あるいは明石の御方に藤壺の宮との死別を語つてもいる。その回想された過去こそ源氏の「記憶」なのだろうか。確かに、幻巻そのものが光源氏の生きてきた人生を回顧する物語だったと言えるかもしれない¹³。人生を回顧すること、それは自身の「記憶」を掘り起こすことにつながる。しかし、掘り起こされた記憶ゆえに、喪失がまざまざと感じられることとなる。その記憶による喪失の大きさの確認を、この幻巻は語ってきたといえるのではないだろうか。

第一節で述べたように、源氏と蛸宮の〈記憶の共有〉が、紫の上喪失を際立たせていた。その〈記憶の共有〉から始まった幻巻の一年は、源氏と記憶を共有している人物と、そうでない人物を配置することによって、源氏にとって紫の上の記憶がどれほど大きなものを示してきた。しかし、〈記憶の共有〉はありし日の紫の上を回顧し、共有する人物との「物語」を可能にしても、自身の悲しみを癒すことにはならない。まして、それぞれの「記憶」は、源氏の記憶と同じベクトルを指すものではない。それを端的に示しているのが、女三宮との対面であろう。源氏にとっては、女三宮と紫の上の記憶を共有する可能性があった。しかし、女三宮の記憶は紫の上に向かうことはなく、何心もない様子は、むしろ悲嘆ゆえの出家を厭う源氏にとって理想の姿でもあ

る。だからこそ、現世を「忘却」した女三宮との対話は不可能だったのである。そして、明石の御方、夕霧と紫の上のへ記憶を共有した人々と源氏は語り、歌を詠み交わす。

だが、そうしたへ記憶の共有もまた限界を迎える。季節の推移に任せ、源氏は一人紫の上の記憶と向き合うことができな。その向き合った先にあったもの、それが紫の上の文であった。しかも、その文は「かの須磨のころほひ、所どころより奉りたまひけるもある中に、かの御手なるは、ことに結びあはせてぞありける。」という、源氏と紫の上の苦難の日々の頃のものであった。この「須磨のころほひ」こそ、源氏と紫の上が、まるで死に別れたかのように引き離された時期である。

もてならしたまひし御調度ども、弾きならしたまひし御琴、脱ぎ捨てたまへる御衣の匂ひなどにつけても、今はと世に亡からむ人のやうにのみ思したれば、かつはゆゆしうて、少納言は、僧都に御祈禱のことなど聞こゆ。

（須磨②一九〇）

このように、紫の上にとって源氏は「今はと世になからむ人のやうにのみ思した」るような状況であった。擬似的な生死の別れがここには見える。焼却される紫の上の文が、なぜ「須磨のころほひ」のものであったのか。それは、源氏にとつても、紫の上にとつても、これ以上もないほど辛い別れであったことと無関係ではないだろう。幻巻の源氏にとって、須磨以上に辛い別れがそこにはある。それと対応するかのよう、紫の上にとって辛い別れの時代が選ばれたと考えられるだろう。もちろん、源氏のもとで成長した紫の上にとって、源氏と積極的に文のやり取りをしたのが須磨巻であったという理由もあるだろう。だが、「二条院の姫君は、ほ

ど終るままに、思し慰む折なし。」とされた紫の上の悲しみがここで想起されることによって、源氏の悲しみが増大すると同時に相対化されよう。紫の上の悲しみ、その悲しみが文によって「今」現前する。その悲しみがこそ源氏にとって知らざる紫の上の記憶である。今の源氏と同等に、あるいはそれ以上に悲しみを訴える紫の上の文だからこそ、源氏はそれを焼却する。紫の上の悲しみごと、文を葬送の煙に転化することで、源氏は自身の「記憶」と決着をつけたといえるのではないだろうか。

五、光源氏の「記憶」

幻卷の冒頭、梅枝卷の穏やかで華やかな二人の生活が思い起こされ、そして、物語も終わり近く、須磨卷の別れの苦難が呼び起こされる。源氏にとつての紫の上は、確かに一年の行事を通じて回想されるものであった。しかし、この対比的な物語内の記憶が、源氏の悲しみをより際立たせる。だが、文を焼却してしまうことで、その記憶は証拠を伴うものではなくなる。それは、二条院の紅梅と桜が、もはや紫の上のものではなく、匂宮のものであることも重なる¹⁴。光源氏の「記憶」とそれを引き出す媒体。その媒体を自身の手から離すことで、源氏の記憶は忘却へと向かうのであろう。

御仏名の日、源氏の心中に過去はない。あるのは来るべき新年と自身の出家の行く先である。紫の上の文焼却により、源氏は過去と決別した。文の焼却。それは書かれたものの否定でもある。

『源氏物語』中において、文の存在や筆跡について述べる箇所は多い。梅枝卷において、藤壺の宮や六条御息所などは、死してなおその筆跡が源氏によって賞賛され、書かれたものを未来に残すことこそ求められてい

た。しかし、光源氏の物語の最後に至り、書かれたものは否定される。物語はなぜ、書かれたものを拒否するのだろうか。一つの答えとして、『源氏物語』の筆跡評がそれぞれの人物を表しているように、書かれたものの中には、まさしくその人の面影と過去が内在するからに他ならない。書かれたものを拒否することで、決別へと続くのであるう。

その決別は紫の上の忘却でもある。紫の上を忘れるためには、紫の上がすでにこの世の人ではないことを認識しなければならぬ。源氏による文焼却を紫の上の二度目の葬送と捉えることで、源氏は自らの情念をかきたてる記憶とも決別すると考えられるのではないだろうか。

注

- (1) 例えば、新編全集では「光」と「くれまどひ」が対照的。春に象徴される紫の上を喪った源氏は、春の陽光の中で暗く惑うばかりである。」とする。なお、『源氏物語』の引用は、小学館新編日本古典文学全集により、巻名及び巻数と頁数を示した。
- (2) 幻巻冒頭と、梅枝巻との照応については、すでに様々に考察されている。その中でも、紅梅との関わりについて述べたものとして以下のものがあげられる。三田村雅子「梅花の美―回想の香―」（『源氏物語 感覚の論理』有精堂、平成八年）、倉田実「二条院の紅梅―紫の上の最期をめぐって―」（『源氏物語鑑賞と基礎知識 御法・幻』至文堂、平成十三年）、高橋汐子「幻巻における紅梅」（『フェリス女学院大学 日文大学院紀要』第十号、平成十五年三月）。
- (3) 小町谷照彦『「幻」の方法についての試論―和歌による作品論へのアプローチ』（『源氏物語の歌ことば表現』所収、東京大学出版会、昭和五十九年）。
- (4) 後藤祥子「哀傷の四季」（『講座源氏物語の世界』第七集、有斐閣、昭和五十七年）。
- (5) 稻賀敬二「幻〔雲隠六帖〕」（『源氏物語講座』第四卷、有精堂、昭和四十六年）。

- (6) 幻巻については多くの考察がある。前掲注(3) 小町谷氏や注(4) 後藤氏をはじめとして、阿部秋生「今年をばかくて忍び過ぐしつれば」(『中古文学論考』有精堂、昭和五十七年)、鈴木日出男「光源氏の最晩年―源氏物語の方法についての断章―」(『学芸国語国文学』八、昭和四十八年六月)、神野藤昭夫「源氏物語の時間表現―幻巻のことなど」(『国文学』昭和五十二年一月)、益田勝実「光源氏の退場―幻―前後―」(『文学』昭和五十七年十一月)、高橋文二「源氏物語」『幻』巻の意義・鎮魂と「わたくし」の視座から(『論集 平安文学』第四号、勉誠社)などがあげられる。
- (7) 前掲注(3) 小町谷論、藤井貞和「光源氏物語主題論」(『源氏物語の始原と現在 定本』冬樹社、昭和五十五年)。
- (8) 伊井春樹「紫の上の悔恨と死―二条院から六条院へ、そして二条院へ―」(王朝物語研究会編『研究講座源氏物語の視界三 光源氏と女君たち』新典社、平成八年)。
- (9) 松木典子「源氏物語」紫の上追憶致―幻巻・文焼却の検討を通して―(『中古文学論考』第十八号、平成九年十二月)。
- (10) 『竹取物語』との関連については、早く村井順氏が『源氏物語論 上』(中部日本教育文化会、一九六二)で構想上の類似を指摘し、その後、高橋亨氏が「闇と光の変相」(『源氏物語の対位法』東京大学出版会、一九八二)で帝との関係を考察し、河添房江氏の「源氏物語の内なる竹取物語―御法・幻を起点として―」(『源氏物語の喩と王権』有精堂、一九九二)にいたり、『竹取物語』引用を視座に、紫の上哀悼の物語が読み解かれている。
- (11) 前掲注(3) 小町谷論。
- (12) 源氏の文焼却については、福田敬「いまはと世をさり給ふべきほどちかく」(『源氏物語』「幻巻」小論)、『国文』第七十八号、平成四年八月)で、「これはみずからの葬りを行うことではなからうか。「いとほかなき煙にて、はかなくものほ」ってしまった紫の上をもう一度、みずからの全身全霊とともに火葬に付することである。」と述べられている。紫の上の二度目の火葬という点では本論と重なるが、本論では、「記憶」の問題とかわらせており、その点が相違する。また、前掲注九松木論文では、経供養の発想と関わらせて論じられており、経供養の問題については、辛島正雄「『幻』巻異聞―『無名草子』の評言から―」(『徳島大学教養部紀要』一九八九年三月)が、『無名草子』の「また、御ふみどもやりたまひて、経にすかす」との言葉から、経への漉き返しにつ

いて述べられている。

- (13) 光源氏の述懐については、阿部秋生「六条院の述懐」（『光源氏論―発心と出家―東京大学出版会、一九八九）に詳しい。また、鈴木日出男「光源氏の道心―光源氏論五」（『講座源氏物語の世界』第七集、有斐閣、昭和五十七年）なども参考とした。

- (14) 幻卷の紅梅と桜をめぐって、源氏の居所が二条院か六条院か古来説が分かれている。詳細な検討をする余裕はないが、以下にあげる論考を参考にし、本論では一貫して二条院が舞台であったと考えている。待井新一「源氏物語幻の巻の解釈―二条院か六条院か―」（『国語と国文学』一九六二年十二月）は、幻卷の舞台がどこであるのか研究史を整理し、二条院を主居として時々六条院にわたっていたと結論付けている。また、近年では、藤本勝義「幻卷の舞台をめぐって―喪家・二条院―」（『源氏物語鑑賞と基礎知識 御法・幻』至文堂、平成十三年）が、喪家という観点から二条院説を論じている。

Reading “Maboroshi” of *Genji-monogatari*

KATSUMATA, Shiori

“Maboroshi” of *Genji-monogatari* describe Hikaru Genji whose wife Murasakinoue has died sorrowful all the year through. This book has a peculiar structure that *Waka* play a central role. It is necessary to describe that Hikaru Genji comes to become a priest.

Hikaru Genji spends his sorrow time with various memories. Especially, people that can talk Hikaru Genji and compose a *Waka* each other, hold memories of Murasakinoue in common. That is, Onna-Sannomiya who became a priest can't have a conversation. But, any conversations can't heal Hikaru Genji.

So, Hikaru Genji burns Murasakinoue's letters that remind Hikaru Genji of Murasakinoue. It is an action that disappears Murasakinoue's memories. Hikaru Genji is able to forget Murasakinoue to burn the letters up. To forget Murasakinoue, Hikaru Genji can give up his sorrow.

(人文科学研究科日本語日本文学専攻 博士後期課程三年)